

草原がつなぐ人・自然・文化

全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.60 (Oct. 2024)



カリヤス刈りを体験する全国草原サミット・シンポジウムの参加者（長野県小谷村）

第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり

10月4日～5日、長野県小谷村の白馬アルプスホテルにおいて、「第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり」が開催されました。開会式では、会場である大ホールに150名近い参加者が集まり、地元の児童生徒の歌の披露、主催者や来賓の挨拶などが行われました。その後、基調講演、研究報告、

分科会、全体会、交流会と進み、10月5日には現地見学会と、自治体首長による全国草原サミットが開催されました。

ニュースレター10月号では、基調講演、研究報告、現地見学会の様子を、次回の1月号では分科会、全体会、サミットの様子をお知らせします。



基調講演の報告

(太田陽子：NPO 法人緑と水の連絡会議)

基調講演はまず「カリヤスを刈る、茸く、雪国に暮らす知恵を探る」と題して、安藤邦廣先生（筑波大学名誉教授・日本茅茸き文化協会代表理事）にお話をいただきました。

ここ小谷村で用いられる「カリヤス」は中部山岳地帯と北陸で用いられる高地性の茅で、「小茅」とも呼ばれます。「大茅」と言われるススキに比べて、中空で小型、刈りやすく軽いのが特徴です。また、ススキやヨシは12月後半でないと刈ることができないのに対し、カリヤスは10月20日すぎに刈ることができ、雪が降り出す前の2週間で作業を終えることができます。雪深いこの地での茅採取に適した材料だという説明に、植物利用の知恵を知ることができました。

刈り取ったカリヤスは、かつては家の周囲を囲むように立てて置き、乾燥させると同時に家屋の中の保温にも役立っていたそうです。また、屋根に使われたカリヤスが役目を終え古茅となった後は、この地域で盛んだった養蚕を支える桑畑の肥料として使われました。さらに、古茅は茅場の草とともに家畜の飼料や敷草にも使われたそうです。茅の利用



安藤氏による講演

については、小谷村以外でも、福島県昭和村の「からむし畑」でのカリヤスの利用や、東伊豆のミカン畑や沖縄の知覧茶の畑へのマルチ材としての利用も紹介されました。このような茅を中心とした地域内での循環が、炭素の固定や生物多様性の維持にも役立っているということでした。



安藤氏と松澤氏の対談

安藤先生のお話の後、松澤敬夫氏（小谷村の茅葺き師）が登壇され、安藤先生との会話形式で、小谷村の茅葺きの詳しいお話をうかがうことができました。松澤さんは茅葺き職人だったお父様に中学校から弟子入りし修業を積まれました。

昔は茅葺きは手がかかるといので、サワラ等の材を割って板葺きにしていたそうです。また、地域内には職人も少なく、ほとんどが県境を越えた新潟の高田地方から出稼ぎにいられていたそうです。その後、その方達に教えを請い、自分たちで屋根を葺くようになったということでした。新潟の方からやってきていたのは職人だけでなく、「越中馬」と呼ばれる馬もあり、冬の間だけ飼って堆肥を取り、春の田起こしまで借りていたそうです。

松澤さんの家の茅場は 200～300 束の茅が取れたということですが、それらは人力で運びました。秋の茅刈りは 2 日間、家族で行っていたそうです。葺き替えは、前の年のお祭りの後に希望する家が申し入れをし、話がまとまれば周知されるそうです。葺き替えには 1 軒で 3～4 人の職人さんが従事し、あとは村の人が手伝って、だいたい 3～4 日で葺きあげたということでした。

当時の松澤さんの集落内では 100 戸の茅葺き屋根があり、茅を持ち寄れば 1 年に 2 棟は葺けたため、50 年に 1 回の葺き替えというのがちょうどよいサイクルになっていたようです。だいたい 20 年経っ



茅葺きの話をする松澤氏

たら葺き替えの準備をするため、一代で 1 回の葺き替えが回ってくるくらいだそうです。安藤先生からは、屋根が 50 年以上保つのは日本の中でも最高の技術であるためだとのコメントをいただいていた。

その他にも、春の山菜として定番のワラビが出るような茅場が良いとされるが、あまりワラビがたくさん生えると茅がなくなるため、ワラビは春のうちにどんどん取るのがよく、茅場を整理刈りする際も、ワラビのところをしっかりと刈って春にきちんと燃やせるようにするといった知恵も披露されました。

このように、松澤さんのお話からはかつての村の生活や、茅葺き屋根の集落の様子などがリアルに想像でき、松澤さんは生き証人であるという安藤先生の言葉に納得しました。現在は茅葺きのままの屋根はほとんどなくなったそうですが、「茅葺きがないとダメだと思ってほしい」と言われた松澤さんの熱意と愛情を感じられました。

各地の茅葺きをご存じで俯瞰した視点から語られる安藤先生と、地元の知恵をじっくりと聞かせて下さる松澤さんのお話で、小谷村の茅葺きの特徴が浮き彫りになり、大変楽しくあっという間の 1 時間でした。

研究報告を聞いて

(佐久間智子：NPO 法人西中国山地自然史研究会)

研究報告では、信州大学の井田秀行先生から「茅を育て、文化を守り伝える草原」というタイトルで小谷村の牧の入茅場についてのお話を伺いました。

小谷村の牧の入茅場の特徴は、カリヤスというススキとよく似た異なる種類のイネ科が生育していること、火入れにより草原環境が維持されていることです。ススキとカリヤスの分かりやすい違いは、ススキは管が詰まっているのに対し、カリヤスは中空になっていることです。カリヤスはススキよりも早く枯れる、すなわち、早く刈れるということが、雪国の資材として適しているということでした。カリヤスはススキよりも長持ちするそうです。

牧の入茅場では、5月のゴールデンウィーク頃に火入れが行われ、集落から100人くらいが参加されるそうです。気象条件に左右されるため、日程変更も多いということでした。牧の入茅場での火入れの方法について、写真と動画を用いて説明していただきました。火は稜線から着火し、レイキで火種を引っ張りながら、斜面下から回り込むように火を広げ、最後に下からの火と上からの火がぶつかって鎮火するという方法でした。動画を見ると、斜面中腹から下部にかけての傾斜は比較的なだらかで、炎はそれほど高くなく、地域の方が連携しながら、安全に火入れが行われている様子でした。

小谷村では、ゲレンデにされなかった草原が茅場として残っているそうです。1950年頃までは、3集落100棟分の茅を牧の入茅場で賄っていたそうです。牧の入茅場の面積は7haであり、25,000把の茅が収穫できます。1棟に必要な茅は8,000把で、それ

が50年維持されます。1年間で2棟ずつ(16,000把)葺き替えを行い、残りの茅は補修や馬の餌として利用し、50年で3集落100棟分の葺き替えが行われていたそうです。

火入れの温度についても教えていただきました。火入れの温度は、地表が150℃、地表から30cmが350℃、地表から100cmが170℃となり、膝の高さが最も熱くなるそうです。反対に、地下1cmでは40℃、地下2cmでは22℃であり、火入れをしても地中の生き物には、ほとんどないダメージがないそうです。炭素を蓄積する観点では、牧の入茅場は「草の燃焼炭+茅の根+火山灰」の形で、多くの炭素を蓄えているそうです。地上部の茅を利用することで炭素はとどまり、古茅を肥料として利用することで、更に長い期間、炭素をとどまらせておくことができます。防火区と火入れ区での実験では、火入れを行うことで良質な茅が取れることが示されています。

意外な点として、カリヤスが優占する茅場に生育する植物は、オミナエシ、ヤマハギ、オオナンバンギセル、クララなど30種程度であり、火入れを行わない茅場に比べて多様性は低いそうです。

最後に井田先生から茅場の維持を自分ごとにするための提案が示されました。行政、政治家、企業、研究者、若い人、若くはない人、自然好きな人、伝統文化好きな人など、それぞれの視点で茅場と関わる事が可能であり、自分ごとにする事が茅場の維持に貢献する第一歩であることが分かりました。



井田氏による研究報告



牧の入茅場の紹介

現地見学会の報告 (富高まほろ：筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所)

現地見学会では、参加者は4台のバスに分かれて乗車し、グループごとに雨中ショクの茅場、牧の入茅場、牛方宿の3つの場所を見学しました。

雨中ショクの茅場

東京農業大学教授の武生氏から茅を焼いている草原に見られる土壌「黒ボク土」についてお話を伺いました。実際に60cm程度の黒ボク土が堆積した土壌断面を見学させていただきました。黒ボク土はイネ科の腐植が供給されることによって色が黒くなることを確認するために、20年ほど前に草原だったものの現在は森林の場所の表土と茅場の表土を比較しました。黒ボク土の黒い色は、森林の方が茅場よりも薄くなっていました。黒ボク土についてはまだまだ未解明な部分は多いものの、茅場の土壌が持つ炭素貯留の機能への期待が高まりました。

次に、地元でショクの茅場に関わっている萩澤氏より、火入れ方法等の管理技術についてのお話を伺いました。防火帯の作り方や15名程度で行う火入れの方法について伺いました。現在28名の所有者がおり、うち9名は新規参入とのことでした。茅を収益化する仕組みを今後さらに検討していきたいとおっしゃっていました。



黒ボク土の様子

牧の入茅場

信州大学教授の井田氏に、カリヤスとススキの見分け方についてご説明いただきました。カリヤスの特徴としては小穂から10cm程度の場所に1枚目の葉がつくこと、茎がストロー状であること、小穂が4~5本であること、ススキの特徴としては、茎が中空ではなく詰まっていること、小穂が10本以上あることなどが違いであることなど、実物を触れながら違いを確認しました。

次に、地元の熟練者の田原氏・中村氏より茅刈りの技術についてご説明いただき、参加者は交代で茅刈りの体験をしました。茅の刈り方、茅束の縛り方、茅束を立てて乾かす方法について実演を交えながら



牧の入茅場での見学会

効率的に、質の高い茅を生産する方法を教えてくださいました。

長野県宝旧千國家住宅：牛方宿

小谷の茅葺き師である松澤氏による茅葺きの説明をいただき、模型を使った茅屋根の刈り込みの実演を見学しました。見学の後、丸に沿った専用の刈込み鉋を用いて、茅葺屋根模型を参加者が交代で模型の刈り込み体験を行いました。参加者は滑らかな刈り込みの難しさを実感し、目の前の大きな茅葺き屋根を作り上げた職人の技術に改めて感動していました。

繊維材料となる麻の栽培が以前はこの地域の中で盛んで、表面の繊維をはがした後の麻殻が茅葺屋根の下地によく用いられていたそうですが、麻は現在では大麻の規制が厳しくて新たに入手するのが難しくなっているのが課題になっているとのことでした。20年ほど前に葺き替えした牛方宿の屋根や建



牛方宿での見学会

物内部を見学し、茅葺の建物の涼しさや香りを感じることができました。

現地見学会を通して、茅場の草原から茅が生産されて屋根材として利用されるまでの小谷村の草原と人々との関わりを学び、自然と文化が長い間継承されてきたことを体感しました。土壌断面の作成や、

ススキ・カリヤス見本、茅束や茅立ての事前準備、刈込み実践のための茅葺屋根模型の事前作成など、草原の価値や魅力をより多くの参加者に伝えるために、関係者の皆様方が充実したプログラムを用意してくださいました。間近で見たり触れたりする機会をくださったおもてなしに心から感謝いたします。

現地見学会に参加して (布野日奈子：東京大学農学生命科学研究科森林科学専攻)

現地見学会では、牧の入茅場・雨中シヨクの茅場（ともに文化庁「ふるさと文化財の森」）・長野県宝旧千國家住宅（通称 牛方宿）の3か所を見学しました。

牧の入茅場は、白馬乗鞍地区の南側の斜面に広がる、約30haの茅場の草原です。視界に入る斜面のすべてが茅場なので、茅刈り前、一面がオレンジ色に染まる季節はとても美しい風景になるのでしょうか。現地では、信州大学井田教授より、カリヤスとススキの違いについて現物を用いて説明され、主に穂の数と形状、葉の位置、断面から区別可能であることを学びました。また、茅刈り熟練者である田原さん、中村さんより茅刈りを実演いただき、見学者も鎌を持って茅刈りに挑戦しました。カリヤスは中空で軽い女性でも刈りやすく、刈った束を地面に立てて整える際にへたることなくしっかりと立つので、その丈夫さを感じられます。

雨中シヨクの茅場は、雨中地区の西上方の山の斜面にあり、約30haの共有地で、13haあります。5月連休の火入れ2週間後には、ワラビ畑に姿を変え、観光客がワラビ刈りを楽しまします。東京農業大学武生教授の現地調査より、土壌の黒ぼく土は、牧の入茅場の30cmに対し、雨中シヨクでは60cmを確認され、その要因は8万年前の火山灰の厚さであると

考察されました。また、雨中地区は地域外からの移住者が多いことが特徴の一つで、火入れに関心のある人がボランティアとして参加しています。管理を担う雨中林野組合では、転出する人の権利を組合が買収し、転入した人に売却する仕組みをとっています。地元の萩澤さんは「火入れは行事であり、習慣」だとおっしゃいます。

長野県宝旧千國家住宅は、塩の道、千国街道沿いの杓掛地区にある間口6間、奥行10間の寄棟造りの茅葺きの民家です。小谷の茅葺き師である松澤さんによる茅屋根の刈りこみの実演では、“サザエさんの歌”のような軽やかなリズムで非常になめらかな斜面に仕上げられました。見学者の体験では「斜面にハサミの跡がついてしまう」「音と香りが心地よい」など楽しそうな声があがりました。そして、秋刈りのカリヤスは、油、コシ、柔軟性があるため、カリヤスを両手で曲げようとすると、そのしなやかさを感じられます。また、茅葺き屋根は、草丈の長い茅をしっかりと結び付けられているため、鳥により抜かれることはなく、また、雨が降っても表面1~2cmが濡れるのみで軒には水がまわらないため、軒を見ると茅葺きの質の良さが分かることを教えていただきました。



牧の入茅場での茅刈の実演



茅葺き職人による実演

「未来に残したい草原の里 100 選」 認定書授与式

「未来に残したい草原の里 100 選」では、新たに 5 地域が選定されました。10 月 4 日の午前、全国草原サミット・シンポジウムに先立ち、長野県小谷村

の白馬アルプスホテルにて、認定書の授与式、選定された団体からの事例紹介が行われました。認定書の授与式の様子について、以下に報告します。

主催者および来賓あいさつ

開催にあたって、全国草原の里市町村連絡協議会会長の中村義明氏より、主催者からの挨拶がありました。挨拶の内容は以下のとおりです。

かつて日本の暮らしを支えてきた草原。屋根の茅葺き材も、牛馬の飼料も、ワラビやセンブリなどの食物や薬草も、すべて草原から得てきました。秋の七草を愛で、盆には草花を供えるなど、豊かな心情や文化も醸成してきました。

しかし今、草原は国土の 1% にまで激減しています。草原から毎年の恵みを得るための利用ルールや、草原維持のための技術が失われつつあります。

一方草原のある暮らしは、人と自然との長年にわたるやり取りを通じて多くの知識・意識・技術を紡ぎ、価値ある「共創資産」を育んできました。「草原の里」に残る共創資産を、持続可能な自然共生型の社会への道しるべとして次世代につなぐため、「未来に残したい草原の里 100 選」を始めました。2021 年秋に第 1 回の公募が行われ、以来今春の第 3 回審査までに、53 地区の草原の里が選定されています。

本日から開催される「第 14 回全国草原サミット・シンポジウム in おたり」は、2021 年の東伊豆



大会以来 3 年ぶりに、私ども小谷村での開催が叶いました。全国から草原の保全・再生・利用に関わる人々、草原の将来に関心を持つ多くの人々が集まり、それぞれの地域の取り組みや、抱える共通の課題について話し合い、学び合います。新しく草原の里に仲間入りした皆さんとも手を携えながら、未来に向けたこれからの暮らしづくりについて考えて行きましょう。

続いて来賓として、環境省自然環境局より、ご挨拶を頂きました。

認定書授与式

今回新たに蘇苔された 5 地域の代表者に、全国草原の里市町村連絡協議会の中村会長より、認定書が授与されました。授与後には、各代表と中村会長と

の記念撮影が、また最後には選考委員も含めた全体での記念撮影も行われました。



高清水自然公園ひめさゆり群生地（福島県南会津町）

福島県のひめさゆり群生地管理者代表の青木泰氏より、「山焼きと草の利用が育むピンクの花畑」と題して、事例紹介がありました。

高清水自然公園ひめさゆり群生地は、福島県南会津町（旧南郷村）と昭和村の町村境に位置する標高918 mの山上にあります。草原の面積は約3.5haで、国内有数のヒメサユリの自生地でもあります。当地では、ヒメサユリの花期になると、多くの来訪者が花を楽しみに訪れており、地域の重要な観光資源にもなっています。また現在も、カリヤスの茅場として利用されています。

管理と保全是、南会津町が主体となり、地域住民の協力を得ながら行われていますが、人口流出による高齢化やイノシシ等の食害が課題となっています。

今回の選定を機に、ひめさゆり群生地を「残していきたい」、「守っていきたい」という思いが強くなっていったほしいと願っている、とのことでした。



山中湖村明神山の草原（山梨県山中湖村）

平野入会組合の渡邊敬介氏より、「霊峰富士を望むスキ草原」と題して、事例紹介がありました。

本草原は、山中湖東部標高1291mの明神山の西斜面に位置しています。草原と山中湖、そして富士山、遠くには南アルプスが織り成す絶景の草原です。昔から平野集落の住民が行ってきた火入れにより、草原の維持と資源管理が行われてきました。従来のかや採取といった原材料を得る供給サービスに重点を置いた利用から、現在では新しい担い手である若い世代が火入れを行いつつ、保全を前提として草原の観光利用も推進しています。

現在の課題として、オーバーツーリズム、シカの食害、特定外来種の侵入、登山道の修復などがありますが、環境省、県の研究機関、域外NPO法人や外部専門家らとの交流も活発に行っており、課題の

解決にも取り組んでいます。草原の里100選を契機として、草原と火入れの歴史文化、生物多様性保全など普及啓発を図ること、そして地域の誇れる草原となるよう、多様な主体と共通認識を持ち次世代に受け継がれることを期待している、とのことでした。



小谷（長野県小谷村）

今回の全国草原サミット・シンポジウムの会場でもある、小谷村教育委員会教育長の関芳明氏より、「北アルプス山麓のカリヤスの草原」と題して、事例紹介がありました。

茅場として機能している草原は全国的にはそれほど多くなく、さらにカリヤスの茅場となると数える程度と、少ない状況です。小谷村では、稀少なカリヤスの茅場として、文化庁の「ふるさと文化財の森」に2カ所が設定されています。また、大学などの研



究者が、茅場の植生や土壌、茅の成長の違いなどを研究しています。

他の地域と同様に、小谷村の茅場も火入れや維持管理には課題を抱えており、草原の里 100 選の認定

を契機として、他の草原の里がどのような維持管理の体制を整え、どのような思いで臨んでいるかを学び、また、茅場以外にどのような活用方法が可能なのか考えるきっかけにしたい、とのことでした。

新庄村田浪郷土自然保護地区（岡山県新庄村）

新庄村の山田幸紀氏より、「多様な動植物を育む小さな山地草原」と題して、事例紹介がありました。

今回選定された草原は、鳥取県との県境、中国山地の尾根付近にあり、大山隠岐国立公園をなす標高 1,219m の毛無山の一角に位置しています。この地の代表種は、2016 年に「種の保存法」に基づき「国内希少野生動植物種」に指定されたウスイロヒヨウモンモドキです。

新庄村では当地を 2021 年に郷土自然保護地区特別保護区に指定し、自然と共生する未来のために村と地元団体、環境省や専門家らとの協力関係の中で活動を行っています。

ウスイロヒヨウモンモドキは 2016 年に卵塊が 1 つ確認されたのを最後に自然発生が確認されておらず、現在は本種の再導入を視野に入れて活動してい

ます。チョウの食草であるカノコソウやオミナエシ、吸蜜植物であるオカトラノオなどの保護も進めています。一方近年では、鹿の食害も顕著で、限られた人員で整備などを続けていくかが課題である、とのことでした。



くじゅう坊ガツル湿原（大分県竹田市）

坊ガツル野焼き実行委員会の高橋裕二郎氏より、「九重連山に囲まれた動植物の宝庫」と題して、事例紹介がありました。

坊ガツル湿原は、標高 1,230 ～ 1,270m に広がる、面積約 53ha の中間湿原です。かつて湿原は、野焼きが行われなくなり荒廃した時期がありましたが、1999 年に九州電力と地元で「坊ガツル野焼き実行委員会」を結成し、野焼き活動を復活・継続しました。それ以降は美しい姿に回復・維持され、2005 年には「ラムサール条約」に「くじゅう坊ガツル・タデ原湿原」として登録されています。

湿原では、春には野焼きが行われ、初夏には周辺の山々でミヤマキリシマが咲き、秋には紅葉が楽しめます。植物では、ノハナショウブやサワギキョウなどが自生し、ホオアカ等の鳥類や草原ならではの動物も生息しています。

草原の里 100 選に選定されたことにより、坊ガツル湿原が幅広く認知され、より多くの登山客が湿原を回遊し、四季折々の美しい自然、動植物等を楽しめるような場所となることを期待しています、とのことでした。



「未来に残したい草原の里 100 選」について

全国草原再生ネットワークでは、全国草原の里市町村連絡協議会(全国草原の里自治体ネットワーク)と協力して、全国に残る草原とその里に光を当て、次世代へ受け継ぐため、「未来に残したい草原の里 100 選」の選定事業を行っています。過去 3 回の選定を経て、草原の里の総数は全国で 53 箇所となり

ました。

2004 年度も、第 4 回となる募集を行っています。また、2023 年度に選定された 5 地域を紹介した冊子を発行するためのクラウドファンディングも始めています。

未来に残したい草原の里 100 選 2024 年度募集中

現在、第 4 回目となる 2024 年度の募集を開始しています。まだ応募されていない地域のみなさまは、ぜひ応募下さい。また、そのような地域をご存じでしたら、情報提供やチラシの配布など、ご協力をお願いいたします。

詳細はホームページをご覧ください。

<http://sato.sogen-net.jp/>



未来に残したい
草原の里
100選

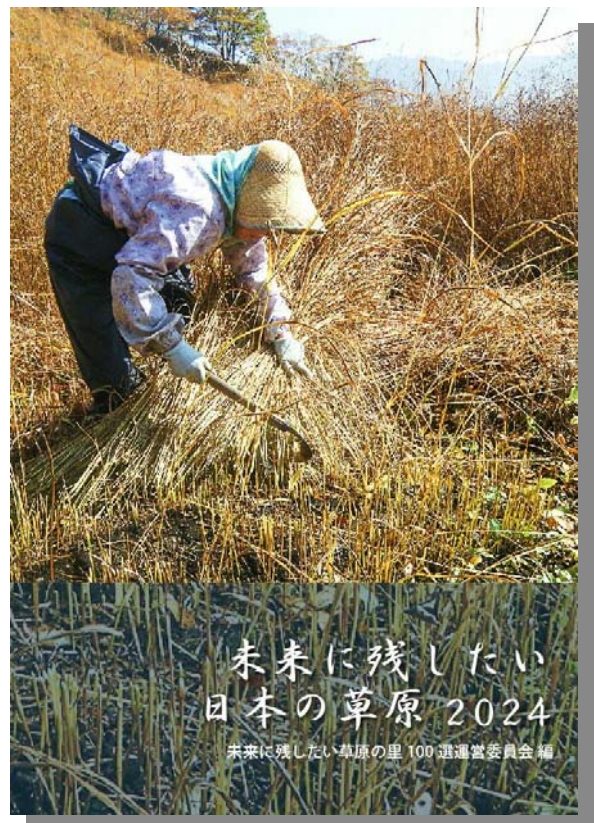
書籍「未来に残したい日本の草原」発行のためクラウドファンディング

新たに「未来に残したい草原の里 100 選」に選定された、全国 5 箇所の草原の里を紹介する書籍の発行を計画しています。現在、発行に必要な資金を集めるため、クラウドファンディングで協力を呼びかけています。

会員のみなさまのご協力を頂きますとともに、お知り合いの方へのお声がけなど、ご協力をお願いいたします。

詳細はこちら

<https://camp-fire.jp/projects/796893/view>



草原をめぐる動き (2024年10月～2025年1月)

- 10/5 自然観察交流会⑦ (場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 10/26-27 上ノ原の茅刈り(場所:群馬県みなかみ町、連絡先:森林塾青水)
- 11/2 茅刈り体験 in 戸隠 2023 (場所:長野県長野市戸隠スキー場中社ゲレンデ、連絡先:戸隠観光協会) 11/9, 10 も開催
- 11/10 八幡湿原の野鳥観察会 (場所:広島県山県郡北広島町、連絡先:西中国山地自然史研究会)
- 11/16 乙女高原自然観察交流会⑧ 草刈り準備 (場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 11/16 東お多福山草原晩秋の全面刈り作業 (場所:兵庫県神戸市 東お多福山、連絡先:東お多福山草原保全・再生研究会) 12/7 も開催
- 11/23-24 上ノ原の茅出し(場所:群馬県みなかみ町、連絡先:森林塾青水)
- 11/23 乙女高原の草原を守る!草刈りボランティア (場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 11/23 山焼き準備と茅刈り体験 (場所:岡山県真庭市蒜山上徳山地内、連絡先:蒜山自然再生協議会)
- 11/23 千町原の茅刈り (場所:広島県山県郡北広島町千町原、連絡先:西中国山地自然史研究会)
- 11/23 ASO 草原フェスティバル (場所:熊本県阿蘇市小里 阿蘇草原保全活動センター、連絡先:阿蘇グリーンストック)
- 12/7 乙女高原自然観察交流会⑨ (場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 12/15 野焼き支援ボランティア初心者研修会 (場所:熊本県阿蘇市小里 阿蘇草原保全活動センター「草原学習館」、連絡先:公益財団法人阿蘇グリーンストック) (12/21, 1/12, 1/18 にも開催)
- 1/11 乙女高原自然観察交流会⑩ (場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 1 月中旬 田島ヶ原サクラソウ自生地の草焼き (場所:埼玉県さいたま市桜区 桜草公園内「田島ヶ原サクラソウ自生地」、連絡先:さいたま市教育委員会 文化財保護課)
- 1/25 若草山山焼き (場所:奈良県奈良市奈良公園内 若草山一帯、連絡先:若草山焼き行事实行委員会事務局 (奈良県奈良公園室))
- 1/26 第 21 回乙女高原フォーラム (場所:山梨県山梨市 夢わーく山梨、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 1 月下旬 小貝川の野焼き (場所:茨城県常総市小貝川河川敷、連絡先:自然友の会 (水海道市))
- 1 月下旬 菅生沼の野焼き (場所:茨城県坂東市菅生沼、連絡先:ミュージアムパーク茨城県自然博物館)
- 1 月下旬 本州最南端の火祭り (場所:和歌山県東牟婁郡串本町潮岬望楼の芝、連絡先:串本町観光協会・串本町役場産業課)
- 1 月下旬 都井岬の野焼き (場所:宮崎市串間市都井岬、連絡先:串間市観光物産協会・都井岬ビクターセンター)

※予定が変更になる場合があります。上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 60 2024年10月号

一般社団法人全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 378-14
大田市ゲストハウス雪見院内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-86-8899

【編集後記】10月に長野県小谷村で開催された全国草原サミット・シンポジウムに参加しました。前回の東伊豆町はオンライン開催でしたので、久しぶりの草原サミットへの参加となりました。現地で実際に会って話をするのは、オンラインの手軽さとは違った良さがあることを改めて感じる事ができ、また久しぶりに各地の様子を伺うことができた有意義な機会でした。サミット・シンポジウムのうち、分科会と全体会、草原サミットの様子は、次回1月号で紹介する予定です。